

「倭が洋服を着るとはけしからん」

増山雄三

「李氏朝鮮（李朝）」は、隣の明が勃興すると共に興ったが、その誇りは、儒教という文明主義の国である事で、十四世紀末の建国後、ほどなく儒教を国教とし、五百二十年近くも続いたが、それが骨の髄まで習慣化した点では、日本とは大きく異なっていた。

儒教と言うのは形式を重んじ、時には形式そのものでもあるが、例えば、親への仕方や祖先への祭祀、それに、血族の順序や尊卑貴賤というような、身分制を固守するなどの形式こそ、極めて大切だったのである。

特に、李朝の儒教は、儒教を生み出した中国よりも形式に厳格で、それはいわば優等生の体制と思想で、形式を厳格にするために、つねに他を論難し自他を正し、時には咆哮しなればならなかった。

春秋左氏伝に、「礼は国の幹なり」というように、人倫の秩序を守るための基本でもあり、秩序とは現代風に言えば、上下の差別を重んじ、自他の差を服装や儀礼で装飾化する事であり、差別こそが国の幹なのである。

それで、李朝は国際関係も、当然ながら礼で律し、清国に対しては、これを「天朝」と呼び至高の国とし、北京に住む清国皇帝を、地上を支配する唯一人としたが、それは本気でなく、多分に架空なことだが、その架空こそ、礼の本質でなくもない。

それで、李氏朝鮮の国王にとって、北京の皇帝は本家の当主であり、みずからは身を屈して、分家であることを固く守っていたが、それが礼という儒教秩序であり、西洋風にいふところの属国ではない。

また李朝は、清を文明の中心である中華とする一方で、みずからは《小中華》をもつて任じたのは、なにやらいささか馬鹿げているが、礼には多少の滑稽感がともない、ここで

いう華とは、野蛮に対する反対語である。ただ、李朝の儒教にとって、当惑この上なかつたのは、北京の天朝の内実のことで、清の帝室が、もとは東北の山野にいた、野蛮人の女真だったことが、華の観念に矛盾し、さらにこの蛮族は、漢民族を支配する女真人の髪型である、辮髪を強いたのである。このように、これまでの髪型を、蛮風に変えることは礼にもとるが、そういう蛮夷の帝室を、華の本家として崇めるのは、朝鮮儒教にとって、大きな観念上の矛盾だったが、幸いにも、清は朝鮮に辮髪を強いなかった。ところで、前王朝の高麗朝は、仏教を尊んだが、それを亡ぼした李朝は、仏教を排して儒教に代え、当時の日本は室町時代で、倭寇という私貿易が盛んになり、朝鮮に対しては対馬島の倭寇が猖獗し、その後、豊臣時代には、秀吉の無意味な朝鮮侵略があった。つぎの徳川幕府は、宗氏対馬藩を特別な藩とし、朝鮮外交の事務を請負わせたが、この

島からは釜山も見えたが、山ばかりの島で米が殆どとれなかったので、信じ難いことながら、対馬藩は朝鮮国王から毎年、米百石と官職を貰い、両属という形をとっていた。

江戸時代、朝鮮国王から江戸の将軍に対して、前後十二回にわたり通信使が派遣されてきたが、享保四年（一七一九年）の通信使の製述官申維翰の紀行「海游録」で、一行が対馬の城下厳原に着いた時、藩の通訳が、藩主に拝謁させようとしたと書かれている。

それで、この紀行文の中で申維翰が、「この島は朝鮮の一州県にすぎない！」と咆哮したうえ、さらに「対馬の島主は、わが国の境界の臣である」と怒鳴り、加えて、「朝鮮国王の直臣である自分が、一地方官になぜこちらから出向いて挨拶の礼を取らねばならないのだ」、といったのである。

それでも、それらはどうでもよいにせよ、小中華という架空の真実の中で生きる、儒教徒の申維翰は、日本人に対し、《人》という

文字を使わず、人とは文明人なので、彼の定義によれば、それは、中華と小中華の場合でのみ、使われるに相違ないのだ。

そして、彼の文中では、対馬の人々を群衆と言わずに《群倭》といい、くどいほど差を明らかにしているが、倭というのは、人間の形をとっているとはいえず、内容は野蛮人である、という意味の事をいっているのである。

また朝鮮が小中華であると空想した以上、これに伴う辺境の蕃国が存在せねばならず、そういう秩序体系の礼でいえば、対馬藩についていえるは、空論の上ながらも、朝鮮の蕃国にせざるを得ないのである。

それで勢い余って、日本全体についてもまた、小中華の蕃国にしてしまい、現実がどうであれ、そうあらねばならないというような態度を、海游録は終始とリ続け、やがて李朝は、日本のことを、《倭夷》と行って正称のようにつぶよようになり、それが朝鮮儒教における、礼というものであった。

ところが、その倭夷が、一八六八年、明治維新という革命を起こしたが、当時、対馬藩は江戸時代を通じ、釜山の西にある草梁に、二万坪ほどを李朝から租借し、商務のため藩吏が常駐していたが、その藩吏が租借地からは、一歩も出られないという事は、出島のオランダ屋敷によく似ていた。

維新成立の前年、最後の將軍慶喜は、政権を朝廷に戻したと、書簡で対馬藩を介して朝鮮に通告したが、これに対する応答は一切なく、朝鮮の礼とは、日本の言う礼儀や行儀という、互敬的な作法ではないものの、それにしても、二世紀にわたり外交関係があった、徳川家の当主慶喜に対し、返事もしなかったところに、礼の持つ滑稽感がある。

また維新成立早々の九月、新政府は同じく対馬藩を通じ、その旨の書を送ったがこれも返書はなかったので、三人の使者が釜山の倭館へいき、維新成立の事情を告げたが、これもソウルからは何の応答もなかった。

五年後になって、李朝はやっとその意思を表明したが、それは日本に対するものでなく、倭館に出入りする朝鮮人に対する貼り紙で、その文章は誠に激しく、「倭が洋服を着るとはけしからん」というもので、隣国のやった起死回生の明治維新を、礼の論の中で片付けられているのだ

また、維新成立を告げた文書の中に、「皇室、皇祖、皇上」という用語について、告示文は目をむいてとがめているが、八世紀成立した日本書紀の「天皇記」など、むろん朝鮮では、野蛮国の書だから読まれていなかったに相違なく、ともかくも天皇という言葉に、十九世紀なって初めて驚いたのである。

いうまでもなく、李朝の礼では、「皇」の付く人は北京に在すのみであり、それをとがめたのは、「倭」はおろかにもそんな事も知らないという意味で、互いに誠に遙かである

と、嘆息するほかはない。

令和四年一月